

空穂の伊勢物語研究

今 井 卓 爾

窪田空穂の古典文学研究の一部に「伊勢物語」がある。空穂の「伊勢物語」研究の態度と方法との実態をとりあげ、さらにその研究における問題点を考えていくために、ここでは主として歴史的な視野をもとにして述べてみたいと考える。空穂の「伊勢物語」研究を年譜上から主なものを見ると、非常に早い時期から異常な関心をもっていたことが知られ、またその関心が晩年まで持続されていたものであることがわかる。その研究の当初のものは、「文章世界」の明治四三年一月号に発表された「小話集としての伊勢物語」であり、またその翌々四五年七月五日には中興館から「評釈伊勢物語」が刊行された。「伊勢物語」研究者としてその本領を発揮したのは昭和三年三月新潮社刊行の「日本文学講座」第一五巻に発表された「伊勢物語研究―伊勢物語とその作者―」で、これは昭和六年六月改編再刊されている。空穂の「伊勢物語」研究は「文章世界」の論文によつて出発し、「日本文学講座」の論文によつて確立されたと考えることができる。昭和一三年八月非

凡閣刊行の「現代語訳国文学全集」第二巻に空穂の「伊勢物語」の現代語訳が掲載されており、昭和二十一年二月西郊書房刊行の論文集「平安朝文芸の精神」の中には、「伊勢物語とその作者」と「伊勢物語の文芸性」との二論文が収められている。その後の空穂の研究は、「楓の木」の昭和二十二年四・五月号に発表された「伊勢物語序説」に見ることができ、さらにその研究の集約とも言えるものは、昭和三〇年九月二〇日東京堂から刊行された「伊勢物語評釈」である。本書には当初に「伊勢物語概説」があり、ついで各段の評釈に及んでいる。空穂の「伊勢物語」研究の総収としての質と量とをそなえたものである。

2

「小話集としての伊勢物語」は断章的研究とも言つてよいようなものであって、一貫した論文構成をもっているものとは言えないが、作品としての「伊勢物語」の特色を端的につかみ得ている。まず、

其作の出来た時代、其作者、さうした背景を取り去つてしま

つて、今新たに我々の前に投げ出された作として、立派に独立した価値を保つて行かれると思はれるのは伊勢物語である。伊勢物語には何時見ても興味を覚えさするに足るだけの美所特長を備へて居る。

と書き出している。ここに見える空穂の態度の基本は、作品として見る「伊勢物語」には、時代や作者などの背景を考えないでも適用する価値があることである。明治末年の古典評価は、江戸流のものか、そうでなければ敬遠するかのものが多かったであろうが、そうした中であつて空穂は近代文学に接触し、その作家の一人としての眼識から「伊勢物語」に注目して、新たな価値を見出したものと言える。近代的な短篇の味を知っている空穂が、「伊勢物語を読んで第一に興味深く感じる事は、其中に収められて居る百二十五段の小話は、一つ一つ取り離して見ても殆どみな趣の深い短篇を読むやうな感じのある事である。伊勢物語をもつて歌中心のもの、文章は其歌に添へた端語のやや長いもののやうに解する解し方は、恐らくは当を得たものではあるまい。」と言つて、「伊勢物語」の中に短篇を見出したことは、情性的でない古典觀として十分にその発言価値を認めなければならぬ。「伊勢物語」を近代文学の視野から見て、立派に独立した価値を保つて行かれる短篇であると言っているのであるから、古典文学ではあつても、その普遍性を認めたのである。そして、作者が具体的に指名できようと、できまいと、作品を通じて作者を考えようとする。

伊勢物語の作者については、其れが在原業平であるとか又は

無いか言ふ事について、文芸史家の間に説を異にして居るやうである。がこれは暫く別として、作者はとに角非常に人間に通じた人である。人心の機微なる消息を飽くまでも知り尽した、そして老熟した人であるのは疑へない。

作品の作者が具体的にだれであるかは別にして、空穂には作品から受けとめられる作者の概念が具体的にるのである。固有名詞として作者が指名できても、できなくても、作者は作品から抽出されてきており、また作者の指名は作品評価にはわずらわさないのである。人間に通じている作者は作品から結果した、不動のものであるといつてよい。そういう作者の描写について、

作者の書き現はし方は極めて簡潔である。然り簡潔であつて短いのではない。

といつてその特色を取り出し、「表面に現はしてある事柄は僅かではあるが、其れを通して複雑した心持、長い時間をも、臚げならず想像させる。殊に其妙な物に到ると、語つて居る事は名も分らぬ人の或る時の或るちよつとした話であるが、其れによつて其人の生涯をも想像されるやうながある。」と説いている。さらに描写について、

百二十五段の小話は、殆ど一つとして手離しの抒情ではない、ぢつと庄へ付けた描写である。感じた一面を感じたままに書いたといふやうな拙い事はせず、全体を会得した人が、鮮かに、言葉少なに、そして最も能く他人に感じ得られるやうにと語つてある観がある。

とも説いている。「單純なる句と句と重なつて居る間に、微妙に

も情緒が潜んで流れて居る」「如何にも粗拙である」が、

文章の渋い味とも言ふべき方面は、殆ど遺憾なきまでに現はして居る感がある。

こういう空穂の表現についての説明は、そのまま和歌にも通じそうであるが、空穂は、「奈良朝より平安朝へ懸けた頃の生活の有様、昔も今も変らない人の心持といふものが眼の前に浮んで来る。そして其れが歌ではとても与へられないと思はれる別種の深い興味となつて来る。」と言つて、和歌では表現できそうもない世界であることを述べている。以上のことを具体的に説明したあと、「伊勢物語」における和歌と物語との問題について主張する。

「伊勢物語は歌集としても尊重されて居る。否その方が主であつて、物語の方はむしろ端詞のやや長いものを取られて、一風変つた歌集のやうに思はれて居たらしい。藤原定家が、歌に志す者は古今集についてこの物語を読めと言つたなど、有力な後援となつて居るらしい。が我々は、

歌も素より優れて居るが、興味の上からはむしろ従位にあるもので、主位にあるのは物語の方と見たい。この中にある歌が、もし其背景をなして居る物語の方を取つてしまつたならば、恐らくは面目を改めてしまひはせぬかと思ふ。

こうして、空穂は、従来の常識化、あるいは伝統化しようとしていた「伊勢物語」観を批判し、あらためて小話集としての「伊勢物語」の物語としての普遍的な特色を指示したのがこの論文であつた。こういう評価を「伊勢物語」に与えた根底には、和歌も物語—散文も知っている空穂があるのであって、單なる研究者の目

にうつつた作品ではなかつたのである。

3

「伊勢物語とその作者」は、「伊勢物語の作者はいかなる意図をもつて作をしたか、又いかなる材料をいかに扱つたかといふことを旨としたものである。」作者は、作者としての姓名は隠し得るがしかし作をするにあたつて持った意図は隠すことができない。空穂は、「伊勢物語はいふまでもなく、いはゆる歌物語の集成である。」と言ひ、歌物語は「単に歌だけを進めることによって、一つの叙事をしたものである、叙事といふのが適當でない」とすれば、叙事的進行を暗示したものである。」と説明している。そして、

平安朝に生存してゐた作者の眼前には、歌物語の材料は無限にあつたことと想像される。

とし、歌物語の材料というのは、「端詞の添つた歌のことである。」としてゐる。

端詞の添つてゐる歌を取つて、その端詞を作者の生活記録と見れば、歌はその作者のその時の生活の頂点をあらはしたものととなつて来る。そしてそれとこれと相俟つて、一つの纏まつた、統一を持つた小話となつて来る。小話といふのは適當ではない、極めて短い心理小説となつて来るといつた方が当る。古歌を読むに際してわれわれが持つこの心を伊勢物語の作者も持つた。彼は当時の伝説のうちに、写して持つて読んでゐる冊子のうち、おのづから短い心理小説となるべき材料の、

いかに豊富に、いかに無限にあるかを思つたことであらう。

空穂はさらに説明する。「伊勢物語の作者は、当時の端詞の添つた歌を見て、前にも言つたやうに、その端詞を歌の説明とはせず、作者の生活記録と見ようとする心を起した。その心を起すに際して、従来あつたところのもので、伊勢物語の作者も恐らくは読んでゐたらうと思はれるこれらの歌物語の手法が、或る暗示を与へはしなかつたらうか。与へられたと見、与へられることによつて意図を容易にしたと見る方が、私には自然に感じられる。」こういうことは、さらに發展して考えられる可能性をもっている。

「伊勢物語の作者の意図のうちで、上にいつた、端詞の添つた歌を短い心理小説に變へたことと相並んで注意されることは、それらの心理小説を、大体としては或る一人の一代記のやうに組立てたことである。これは伊勢物語を伊勢物語たらしめた半面に値することである。」多くの材料の中から作者の主観―選択の標準によつて収集された百二十五段の中に在原業平のものが相当数あつたことによつて、一代記風の物語の成立する条件がある。

その百二十五のうちには、偶然にも在原業平に関するものが多かつた。言ひかへると彼の標準から見ると在原業平は最もそれになつた人だつたのである。

「在原業平といふ一人の人に關した材料が多い。これを中心とすればおのずから主人公となる。主人公があれば物語風に組立てることが出来る。」こうして「伊勢物語」は成立したのであって、

伊勢物語の作者の根本の意図は、詮するに短篇小説にあつた。そしてその小説は、作者の主観の最も端的なる表現としての

ものであつたと言ひ得る。

として、空穂は作者の意図の結びとしてゐる。

つぎに空穂は「伊勢物語」の材料についてかなり具体的な説明をしている。中でも、

伊勢物語の地の文を古今集の方へ書き入れて、その書き入れであることが忘れられた結果ではないか。

業平の家集ともいふべきものがあつて、古今と伊勢との両方に關係してゐたのではないか。

という二つの問題について述べ、結局空穂の考えは、

伊勢物語の作者の、文芸家としての力量を最も端的にあらはしてゐるのは、古今集の歌の物語化である。……だが誰も、この作者のしたやうに物語化をしたものはない。端詞のあるものは、それをいささか變へることによつて別種のものとした。無いものは思ひ切つて空想化して、同じく全然別種のものとした。その技巧は尊敬に値するものである。

ということに落ちつくのである。作者が「伊勢物語」を書くために材料にしたものには、「業平家集」、当時の業平の伝記、「後撰集」、「万葉集」などを予想しており、「誰でも知つてゐる材料を物語化することに興味を中心を置いてゐる」とも言っているやうに、相当広範囲のものと考へてゐるやうである。以上のことにも關連して「伊勢物語」の成立時期を空穂は「後撰集」以後とし、最終的には、

伊勢物語の出来たのは、村上天皇以後、一條天皇以前の、村上、冷泉、円融、花山、一條天皇の五代、年として約五十年

のあひだのものと思はれる。

と結論づけている。この論文において空穂は、「伊勢物語」の意図と材料とについて見解を具体的に述べ、あわせて成立時期などについてもふれている。空穂は、論文のはじめに、「以下はいうとするとところは、暫く先哲の研究を外にして、自分が直接に伊勢物語を読んで、読みつつ感じたことに多少の整理を加へたものである。先哲の暗示を受けたもののまじってゐることはいふまでもない。」と言っているように、自分自身の考えを示すことを優先している。そしておのずから他を批判することにもなっている。研究の主体は空穂自身にあり、作家としての空穂が、「伊勢物語」の文学作品としての必然性を割り出したものがここに示されているのであって、その根本は約二十年前の論文と同じものである。空穂が作家として持っている鋭い洞察力の結集された論文であると言える。

4

「伊勢物語序説」は、創元社から刊行を求められた「伊勢物語評釈」のために執筆されたが、発行所の都合によって発表がとりやめとなった。東京堂版の同書の概説とは別のものであるという。近代西欧の短篇小説を読んだ目をもって「例の作歌の参考書であると思つてゐた伊勢物語を今一たび読み返してみると、従来とは全く面目を一変して、短篇小説集に見えて来たのである。一段一段、すべて心理の推移をねらひとした小説である。その表現は、飽くまで客観的描写で、簡潔を極めたものであり、余意余情の豊

かなものであつて、此の点はヨーロッパの小説を遙に凌駕したものである。空穂はこう言っているが、これが「伊勢物語」論の總括である。

「歌物語」とは、歌を取入れた物語の謂ひである。歌と物語とは、言ひかへると抒情と叙事といふことであつて、文芸的表現の二面である。

歌物語をこう概念づけた上で、「伊勢物語」について言う。「叙事と抒情とを調和させて、その作品の魅力とさせようとするこの歌物語の、我が文芸史の上における位置は重大なもので、我が文芸の性格とも言ひ得るものである。伊勢物語は国文をもつて試みた我が国最初の歌物語であり、又、その事の重大さを担ふに足りる優れた作品でもある。」歌物語としてすぐれた作品であることを指摘し、形から見ると、きわめて短かいものばかりであるが、短かいのは、心理現象の一波瀾を扱っているものだからであつて、簡単には見えないが、単純なものではなく、その簡単な中に複雑な心理を含ませているものであつて、「その把握の的確にして、しかも人間心理の深所奥所に徹してゐる上では、これを現代の優れたとされてゐる小説に比しても、優るとも劣るものではないのである。」「伊勢物語」の成立時期はだいたい十世紀末から十一世紀初頭にかけてのことだ。

比較文学といふことが今一歩前進して、此の物語を世界的観点から観る時が来たならば、まさに世界的驚異に値する範圍のものだらうと思はれる。

と、比較文学の立場から評価している。こういう作品の作者につ

いては固有名詞はあげられないが、空穂の考えている作者の枠は、男性であったこと、地位の低い廷臣の一人であったこと、藤原氏に好感を持たなかったこと、物のあわれを昂揚しようとしたこと、教養の高かったことなどが主なものである。こういう「この物語作者の意図は、平たく言へば、眼前にあるものを種として、それに一つの思ひ付きを加へたと言ふに過ぎないものであるが、此の思ひ付きは他の誰にも出来ず、唯この作者にのみ出来たもので、稀有な、非凡なものと称すべきである。此の思ひ付きに作者は、その卓抜にふさはしい文章を伴はしめたのである。」「竹取物語」のようなものであると、説話の興味が高潮してくると、詠歎脈が加わり、自然声を立て、または高めて朗読したくなる。

然るに、この物語の作者は、興味が高潮して来ると共に、その語句を圧搾し、簡潔にし、短い語に多くの意味を籠めたるものとして、翫味しなければ解し難いやうなものにするのである。……物語とはいへ、朗読といふことから離れ、黙読を要求してゐる形で、その点が即ち類を絶した独自のものとなつてゐる原因なのである。

この物語の文体の特色をこのように空穂がとらえていることは、作者がその意図を表現するための文体としてきわめてすぐれたものであることを言おうとしているのと同じことである。このあと「伊勢物語」の後世への影響と本書の底本について一言して、論を終っている。この論文の趣旨は、すでに見てきた二つの論文のそれと同じであつて、言おうとする所は、「伊勢物語」が心理的短篇小説集ということである。これを比較文学的視野に入れて評価

しているところに、前進的特色を見ることができるとし、また文体への言及も注目すべき点である。「伊勢物語評釈」という著書のための論文であるためもあつて、底本についてもふれるところのあるのも見逃せない。総じてこの論文の基礎をなしているのは、やはり西欧近代文学に接触した作家としての空穂であつて、いわゆる国文学者というだけの空穂ではない。自分の持っている文芸と「伊勢物語」とのふれあいから結実したものがこの論文となつたわけであつて、「評釈」そのものが実証の場になつていたものと考えられる。

5

「伊勢物語概説」は東京堂版「伊勢物語評釈」の巻頭に掲げられている論文である。全体を五項目にわけて述べているので、以下順に従ふことにする。1「本書の志向」の項では、特に伝写本のことをとりあげ、現「伊勢物語」を「大体としては最初の原形を保つて」と考えられている。という線のもとに研究が進められている。そして本研究の底本を藤原定家校訂の天福本としているが、こうしたことにしたのは、恐らく池田亀鑑の「伊勢物語に就きての研究」によつたものと思われる。「本書は、評釈という書名の示すごとく、伊勢物語各段の文芸的価値を説くことを主とし、「評」に中心を置いたものである。」と言っているように、空穂の力を入れたものは「評」であつて、「評」の予備的総収がこの概説ということになる。2「歌物語と伊勢物語」の項では、「記紀・万葉を通じて、歌物語という名称は無かつたが、歌物語そのもの

は厳存し、優に歌界の一分野をなしていたことが知られる。抒情の歌に叙事の事件を添え、興味深いものにしよとする要求が、いかに強いものであつたかと思わせられる。」と言って、歌物語を歴史的に述べ、平安時代の和歌は、「生活必需品と文芸性とが一体となつているもの」であるところから、この時代には、「歌物語の当然復興すべき事情があつた。」としている。ことばをかえて言えば、

歌物語は伝統久しいものである。時代の生活者は、各自に最も身近な、共通のつながりをもつたものとして、歌物語を要求している。更にそこには、歌の背景である事件を叙する文章として、漢文とは比較にならぬまでの、適切にして安易な仮名文がある。

「これらが合致して、新しい面貌をもつた歌物語が復興して来た」ということは、極めて自然なことで、「あつたのである。『伊勢物語』が歌物語として存在する必然性ともいうべき点をこのように空穂は説明している。3『伊勢物語の作者の意図』の項では、文芸、「伊勢物語」の質にふれた問題がとりあげられている。この物語の作者は、「貴族階級の一人で、多分失意の状態を続けていた人が、第三者の立場に立たされて世相を傍観していた人」、「高い教養をもつていた人」、「大乘仏教も身に体し得た人」、「男女関係の体験にも富み、男女心理の機微にも通じていた謂わゆる苦勞人」、「文芸家としての天分」「物語作者としての才」を持った人であつたと空穂は想定している。そして、

伊勢物語を貫通している思想は、物のあはれということであ

り、あはれを知る男女関係である。と云い、

伊勢物語の作者の、人生に対してとつた観点は、この哀れさのもつ美しさということで、それを文芸的に具象的に現わそうとしたのが伊勢物語である。

と述べ、「伊勢物語」作者が把握したこの人間性は、具象的に「伊勢物語」の中に表現され、読む者をして共感せしめ、感動せしめるものになっていくと空穂は見ている。4『伊勢物語の作者の創作方法』の項では、作者の意図した「あはれさの美しさ」をいかにして高揚しようかという点に重点がそがれている。「伊勢物語の作者が、その意図を表現しようとして、第一にその胸中に浮んで来たのは在原業平であつた。」と空穂は言っているが、この業平の歌は「伊勢物語」にはもちろんのこと「古今和歌集」にも長い詞書をもつた特別のものとしてとられている。空穂は、「伊勢物語の成立したと推定されている後撰和歌集の撰進直前」云々という見解をもっているので、「伊勢物語」と「古今和歌集」との前後関係はおのづから明らかである。「古今和歌集の詞書は、いかに長くはあつても要するに詞書きの範囲のもので、和歌を中心にしたものである。伊勢物語は反対に、文章に重点を置き、和歌はその一部に過ぎないものとしつつ、同時にそれを頂点としたものに変えているのである。随つてその結果は、人物と事件を中心とした物語となり、和歌はそれを生かす為の重要な材料となつていくのである。」このため各段が独立した小話になつていくわけである。興味の中心は、「短時間内における当事者間の心理の推移、

ひいてはその緊張の状態の描写であって、

心理の微細を把握する的確さ、それを描写する方法の簡潔にして、同時に余情と拡がりをもっている点は、実に光輝あり興味あるもので、伊勢物語の作品としての価値はこの一点に懸っているのである。

と空穂は「伊勢物語」を評価している。要するに「伊勢物語」の主体をなしている恋愛の諸相は、作者の懐抱していた「あはれの美しさ」の表現であるのである。このあと「伊勢物語」の編集について若干ふれ、この項を終っている。5「伊勢物語の後世に及ぼした影響」の項では、もっとも直接で、また著しい例として「源氏物語」と「枕草子」とをあげ、後者がより直接的影響をうけていると空穂は言っている。以上五項目のうち、2・3・4に中心のあることは言うまでもないが、そのほとんどはなんらかの形ですでに空穂によって説かれていたことである。その基盤は文芸家としての空穂であるが、一方にはいわゆる国文学者の研究成果も参考にしているところが見える。そしてほかの論文とちがって五項目にわけて述べているところなどにも、問題点を整理して書こうという姿勢がうかがわれ、一般の「伊勢物語」研究が時代的にも空穂に及んでいることを思わせる。本書は「評」に重点があり、また空穂がもっともこれに力をそそいでいることがわかるが、それだけにこの「概説」は、序論であり、また結論であると見ることができる。

6

空穂の「伊勢物語」研究の主なものを以上のように見ると、空穂の態度や方法は明治末年から晩年に至るまで、基本的にはかわっていないことがわかる。「小話集」としての「伊勢物語」は比較的短かい論文であり、また論文構成も必ずしもとのっているとは考えられないようなものであるが、そこに取り上げられている、近代文学の意味における短篇小説集的特色は、当時の国文学者のなしえなかった新しい価値の発見、指摘であった。こういう評価をすることのできたのは、空穂が近代西欧文学に接触していた作家であったからである。ここで関連して述べられる作者や描写その他のことも、みな短篇小説集ということにかかわりあうことであった。こういう基本的態度から出発しながら、問題を主として「伊勢物語」作者の意図と材料とに向けたのが「伊勢物語とその作者」であった。前の論文から大約二十年後のものであり、この間空穂の作家活動はつづいていたのであるが、「伊勢物語」に関する所見は、緻密さと重厚さとを加えたものの、本質的にはかわらないものであった。意図と材料とはたがい有機的関連をもっているものであり、また表現や「古今和歌集」との関係、成立時期などもみな、一連のからみあいのもとに説かれ、短篇小説集としての特色の説明の一部と見ることが出来る。この論文からさらに十数年、終戦後の「伊勢物語序説」は、西欧文学的、比較文学的視野にも立っての「伊勢物語」研究であるが、この態度はすでに三十数年前からあったものであった。ここでは短篇小説集としての

「伊勢物語」は勿論のこと、歌物語、作者、表現、文体、影響など、幅広い問題がとりあげられているが、いずれも単独の問題としてではなく、たがいに密接に関連する項目として説かれていく。この論文から八年余、「伊勢物語概説」は目的も標題も前の「序説」と似ているが、問題のとりあげ方に若干のちがいがあがり、さきにあげたように歌物語、作者の意図、創作方法、影響などについて整理して述べられている。こういう項目はこれ以前のほとんどどの論文にも言及されていることであり、また時にはくり返されていることもあった。そしてこれらの問題をたがいからみあわせながら「伊勢物語」の特色を述べているものであった。研究の態度や方法としても、また結論としても、従来のものから逸脱矛盾しているところはない。こういうように空穂の「伊勢物語」研究を遠望してみると、「小話集」としての伊勢物語で出発し、「伊勢物語とその作者」でいちおうの成果となり、さらに「伊勢物語序説」を経て、「伊勢物語概説」がその「評」を伴って総収となっていると見ることができるのである。そして研究の態度や方法の基盤には、作家としての空穂の文芸的思惟がいつも自信をもってひかえているのである。

「伊勢物語」の研究は平安時代からすでにあり、中世、近世を経過して、近代になっても依然として続けられており、関心はますます高まっていると考えられる。「日本文学全書」(明二三)の発刊などによって古典への関心が高められた一部には「伊勢物語」もあった。藤岡作太郎は「国文学全史平安朝篇」(明三八)の中で「伊勢物語」をとりあげて論じているほか、論文などにもこの物

語への関心を示したものがよくあらわれるようになってきた。空穂が「文章世界」(明四三)でとりあげたのもこういう気運があつてのことであつたであらうが、小話集として「伊勢物語」を再評価したことは特異の新見であつた。文芸作品として改めて取り上げられたことになったのである。しかし「伊勢物語」の研究には、こうした評価にもかかわらず、江戸以来伝流しているものが多かった。昭和期になって、国文学の研究はあらたに基礎研究からはじめなければならないという空気が強くなり、その成果がようやく現われてきた。「岩波文庫」「新校群書類従」「日本古典全集」などの「伊勢物語」はいずれも昭和三年の刊行であるが、この年に空穂は論文「伊勢物語研究―伊勢物語とその作者―」を發表している。これは昭和六年に再刊されたが、同じ年に「岩波講座日本文学」・「古典保存会叢書」の「伊勢物語」等が出版され、空穂の研究は、文献学的、書誌学的研究といちおうちがった立場にありながら、論旨は明快であつた。ついで池田亀鑑の「伊勢物語に就きての研究」の校本篇(昭八)・研究篇(昭九)が相ついで出版されて、研究史の上の一つの区切りをつける成果となつた。この研究の中にはいろいろな問題が示されているが、それらの中で、「編纂の態度」中の「詞書の改変」や「成立年時」中の「伊勢物語成立年時に関する従来の研究」の項などに前記空穂の研究が高く評価されている。戦後国文学の研究分野は拡大され、また細分専門化される傾向にあるが、「伊勢物語」の場合もまた同じである。それと同時により高度の普遍化の方向もたどっているのが実情である。空穂の「伊勢物語評釈」(昭三〇)は、池田亀

鑑の研究成果なども取り入れながら、文芸作品としての「伊勢物語」の真価を伝えようとし、伝え得ている労作であり、空穂のこの物語研究の総取でもある。この「評釈」が出てからのち、相ついで「伊勢物語」への関心の高まりを示すものが現われている。その一つが「日本古典文学大系」(昭三二)などの中の「伊勢物語」であり、他の一つは「解釈と鑑賞」(昭三一)や「国文学」(昭三四)などの国文学専門雑誌の「伊勢物語」特集である。これらに扱われている問題の分野は、作家・成立・構成・史的地位・研究史・伝本、あるいは文献・民俗・生成・様式・文芸性・形態・構想・その他であって、いずれもそれぞれ一分野をなす研究である。

る。これらの中には空穂の深く言及しなかった問題もむろんあるけれども、少くとも作品としてふれなければならない「伊勢物語」についての分野には、なんらかの形で空穂は所見を述べているのである。「伊勢物語」という作品や、その作家を知悉するために払われた空穂の努力はたいへんなものであり、行きとどいていたものであることを、従来の研究に比べて十分に知ることができる。こういう空穂が基本的な持っているものは、いわゆる国文学者といわれる研究者の姿勢というよりも、あくまでも文芸作家としてのそれであったのである。

執筆者紹介 一 (五十音順)

篠田 弘	窪田 章一郎	岡保生	岡一男	榎本隆司	上野理	岩津資雄	今井卓爾
小学館編集部	文学部教授	昭和女子大助教授	文学部教授	教育学部講師	文学部講師	文学部教授	教育学部教授

武川 忠一	松野 陽一	藤平 春男	服部 嘉香	橋本 喜典	橋本 達雄	土岐 善麿	都筑 省吾	清水 茂
学院教諭・早大講師	立正学園女子大助教授	文学部助教授	梅光女学院大教授	早稲田高校教諭	跡見女子大講師	武蔵野女子大教授	学院教諭・早大講師	文学部講師